

---

Stay Night-Stand Alone Complex / **世界で最も孤独な王**

少雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate / Stay Night - Stand Alone  
Complex / 世界で最も孤独な王

### 【Nコード】

N7554I

### 【作者名】

少雨

### 【あらすじ】

完結に簡単に「パクリです。」文章として頭に浮かぶのがパクリばかり

- - - - - 作者が諦めました。 - - - - -  
- - - - -

因みに最初からパクルつもりは無かったのでタイトルと関係はありません。タイトルは良い英語名が思いつかなかったのでパクって自己解釈でごまかしました。

つまり終始一貫パクリ物です。

それでも構わない方本編をどうぞ

ポケポケのミスだと槍兵が紅い槍兵になってたり（ゲイボルグが紅いので何故か紅くなってたw）MAD見てて唐突に間違えに気がついた・・・正直トホホです。

4は一応完成6は今詰めてます。夜までお待ちを。

## 色を変える世界（前書き）

とりあえず

「ここまで来ていただいた方に感謝を」

まず、この1話

「自己解釈による変てこなルビ」と「其々場合であった名の呼び方」  
をしてるため読み方が一定していません。

ルル〓孤独な皇帝〓孤独な王〓ルルーシュ

アーカイブ〓無意識集合体〓神〓世界樹〓あの世

シャルル〓皇帝で固定

マリアンヌ〓騎士〓閃光の名を持つもの

C・C〓道化師〓共犯者〓相棒

統一すべきかと色々迷ったのですが結局ばらばらにしました。

「能力の説明」「パクリの釈明」は、次の「能力と釈明」で読んで  
ください。ルルの破格の能力を先に見たい方もそちらを先にどうぞ。

## 色を変える世界

その日は本当に何も無い日だった。

朝4時半に起きて朝の禅問答をして何時も通り5時半に朝飯を本堂で皆と一緒に取り6時前後に寺を出る。高校までは門前の階段を下り。徒歩で2時間。8時前には教室に入り親友に挨拶と今日の生徒会の活動確認。HR授業を受け昼休みは親友と飯を食べ、午後の授業をまじめに受ける。

放課後は生徒会の活動で3時から5時まで会議の後、書類整理を7時まで行った後、食客の葛木先生と共に寺にバスを使い帰る。7時半から皆で夕餉を取り9時まで座禅。ここまでは、本当になにも変わらない毎日だった。

そして9時半頃に部屋に入る際に門下の方から私宛の郵便物を受け取った。

その郵便物には宛て主の名前がなかった一言 柳洞寺 柳洞一成様

そう書いてあるだけだった。

不審に思いつつも誰かが送り名を書き忘れただけだろうと思い、私はその荷物を受け取り部屋の中に入って行った。

そして、今布団の上に一人の日本人が倒れている。

いったい何が起こったのか理解が出来ない。思考が纏まらない。反応が起こせない。

啞然呆然とはこの事かと私の中で冷静な私が話しかける。

その思考に反応する事すら出来ないくらい私は混乱している。

自覚と理解そのずれが埋まらない。それは唐突に襲ってきた。

私は、当然ながらこれに抗おうとしたが人間の3大欲求の一つであ

るこの衝動に混乱した私は屈服した。

く月く日この日、私は目の前に居る不思議な日本人を見ながら意識を失った。

- - - - -

私は深い闇の中にいる。私は愚かだ。この場所に至るためだけに多くの者を傷つけ、多くの者を手にかけた。それは許されざる罪だ。たとえ世界が平和になろうとも優しい世界が実現できるとしてもその間に失われた、

クロビス、日本開放戦線、ユーフェミア、解放区に居た日本人、日本開放の際にフレイヤに焼き尽くされた人々、シャリー、ルル、響団員、この戦いで命を落とした全ての将兵と全ての力なき者達よ。すまない。

しかし、贖罪は果たされた。

ああ、我が愛しきナナリー君は強く生きてくれ。

私のように道を間違える事も無く誰もが笑える優しい未来のために。そしてすまないこんな不器用な兄で、我が愛しき妹よ君を悲しませる事は判っていたのにな。何度でも言おうすまない。

我が友、我が騎士、スザク ナナリーを頼む。

君の主 ユーフェミアを手に掛けたあの日の事はいつでも覚えてるよ。すまなかった。

だからこそ私は君に討たれた、この結末に感謝する。

君は卑怯だと私の為に泣くのだろう。そんな君だからこそ世界を頼む。

紅月 カレン ずっと君にはほんとの事を言わなかったね。すまない。

だが君は笑っていて欲しかったんだ。

君の変わらない笑顔に何度私が救われた事か。

この道を力なく振り返り頂垂れた時に、君はいつでも私を支えてくれた。

だから君はこの世界を精一杯生き抜いてくれ

生徒会の皆今頃驚愕してるんだろっな。

会長が大騒ぎを起こして私と朱雀とシャーリーそれにカレンが生贄にされる中

リヴァルとニーナはこっそりにげ出してナナリーは佐代子さんと近くで笑っている。

ああ懐かしい。出来る事ならもう一度やり直す機会があるのならあの時あの場所で笑いたかった。

ジェレミヤ「ゴッドバルド 君の深いブリタニヤに対する忠義感謝しても足りない。

その変わらぬ忠義に我が名を持って心から感謝と敬意を。

黒の騎士団の連中は今頃目を白黒させてるんだろっな。

ククク扇辺りは意外と勘が良いから気がついたとしても玉木あたりはなにも気がつかずに、

ヤレ！ヤレ！やっちまえーって騒いでるんだろっな。

そんな馬鹿な空間が心地よかった。この4年間私と共にあってくれた事感謝する。

C・C 君は、恐らく哀れな私の為に今も泣いていてくれるんだろっな。

この力を私に与えた事を後悔してるのかい？悔いる事も恥じる事も

ない。

君の選択が私にこの道を示してくれた。それは、私の死より重く嬉しい事だ。

だから君は不敵に世界でただ一人私の為に笑っていてくれ。

例え一人の世界が寂しくても私という共犯者が居た事を心の支えにこの素晴らしい世界永く見守ってくれ。

ユーフェミア クロヴィス ルル今其方に行く。

もし私が君たちの傍に辿り付けたのならまた兄弟として笑いあってくれるかい？

シャーリー君はこの血に塗れた私を抱きしめてくれるかい？

ああ光が全てを飲み込んで……

「そう上手く行くと思っただかね？」

光は突然の暗闇に包まれる。何故？どうして？その言葉が喉から零れ落ちそうになるが、それは言葉にならずに消えていく。ブリタニア元98代皇帝シャルル・ジ・ブリタニアはその驚愕の表情に機嫌を良くしたのか朗々と言葉を続ける。

「フフフアツハツハツハハハハその表情その顔まさに、悪戯を受け  
た悪戯小僧だなルルーシユ」

「あなた。ルル・シユはまだ19の私達の子供なんですから、それはあたり前のことですね。」

その背後から滲み出る用に姿を現したのは青いドレスに青い薔薇の帽子を纏った妙齡の美女、世界皇帝の産みの母にしてブリタニア皇帝シャルルⅡブリタニアに唯一愛された女性。



その名をマリアンヌ・ヴィ・ブリタニア 「閃光のマリアンヌ」の二つ名を生前送られた騎士でもある。ありえない2人との邂逅は少年の思考に冷静な思考を要求する。

走馬灯の見せる幻覚？いやその可能性は低い。

まずこの黒い世界の中にある明らかな違和感。

即ち地面という物質に触れている触感。

そして拳を握り締めて感じる痛覚。

なのに体を動かす事に痛みが無く心臓の周りに傷が無いという事実。

この場所が走馬灯ならここまで冷静な思考を行う事は不可能だ。尚且つ傷が無い説明がつかない。

そしてもっとも重要なのは、この2人はギアスの使い手である事だ。この場所がギアスに関係している場所だとすれば在り得ない事はない。が、この結論はありえない。

理由はこの2人がここに生きている事はありなという理由に基づく。なぜならこの2人は間違いなく私がこの手で消したはずなのだから。アーカイブの中で世界に干渉し世界に命じて2人の存在を消したはずなの・・・！？

「気がついたかルルーシュその通りだ。お前は私達の存在をあの世界から消した。そこまでは正しい。『この世界から消える』とな。よくいうだろう神隠しとな？消えた肉体と魂はどこに行くのだから？」

シャルルは轟然と言い放つ。流石はブリタニアの皇帝だった男だ。その姿に威厳と威圧感が感じられるが、そこに1度殺されかけた相

手に対しての恐怖も殺した相手への復讐心もそこには見られない。だが彼にはその轟然とした態度と何よりその声は耳障りだった。

「他の世界、即ちあの世というわけですか？なるほど。では改めてお出迎え感謝いたします父上。」

その姿に先ほどまでの感傷も驚きも困惑もそこには見えない。見えるのはその場で平伏したくなるほどの圧倒的な存在感、それも当然なのであろう。そこにいるのはわずか19歳にしてブリタニアという巨大国家を打倒し世界に混乱と秩序と平和をもたらした

コドクナオウ  
偉大な皇帝

彼こそが世界を統一支配した世界皇帝その人なのだから。

「挨拶も終わった事ですし、今度こそ本当に殺して差し上げましょうか？父上？」

「ほおー2度も完膚無きまでに敗北した癖に1度私を殺しかけたぐらいでずいぶんと調子に乗るではないか？愚息の身分でこの父に挑む愚かさその身に刻み付けねばならんようだな？」

訂正しよう。見えなかっただけで互いに含む所は大いにあつたようである。

オヤニステラレタモノ  
孤独な皇帝と コトモニコロサレタモノ  
孤独な皇帝

互いに大いの放つ殺気と威圧感で二人の間の空気が重く粘りっこい何かに変質しはじめている。所々静電気が走っているように見えるのは2人のギアスのせいか2人の信じられないクラスのカリスマの成せる技か？

2人はゆつくりと近寄り交差は刹那。皇帝の右腕が振りかぶられ振り下ろされる。

「2人とも親子喧嘩はいい加減になさい」

・・・・・勝者 マリアンヌ 閃光の名を持つ者 「母とは」「妻とは」

恐ろしい物であると。

互いに殴りあう直前にワンパンチでぶっ飛ばされて転がる2人してそんなことを思ったとかなんとか。

- - - - -

部屋にはいった私は椅子に座り机の上に早速送られて来た包みを開いていく。

もしも宛先が違う場合も考えてゆつくりと包装を包み直せるように慎重に包装を剥がしていく。

現れてきたのは綺麗な包装に包まれた1つの桐箱その上に一成様と書かれた1通の便箋と何も書かれていないもう1通の便箋。苗字が書かれていないが送り先といいこの手紙といい私宛の荷物であるのは間違えないのである。私は名前の書いてある便箋を裏返し送り主の名前を捜す。しかしやはり便箋の裏側には何も画かれてはいない。

私はとりあえず封のしてある便箋ではなく。開閉の利く桐箱を開けるために、その2通の便箋を机の脇に置き桐箱を開けようとした。その瞬間感じたそれはなんと言えば良いのだろうか？

悪寒でもない予兆でもなく、触れてはならない物に触れた畏敬とそれを理解してなお開けるべきだと告げる本能あえて言うのなら

ば FATE それこそが 「定め」 (FATE) と告げるような  
そんな不思議な感覚と感動

少年が運命の箱を開くのと同時に10時を表す寺の鐘の音が静かに  
始まりの鐘を鳴らし神戸の町に響き渡った。

Fate / Stay Night / Stand Alone  
e Complex / 世界で最も孤独な王

鐘の音と不思議な感じに数瞬惚けてしまった。

「渴」

自分で自分に1度渴を入れて思考を纏める。鐘の音で惚けるとは私  
も修行が足りない兄のように全てに動じぬ岩の様でならなくては。  
自分を戒めながら桐箱の中に入っているそれを持ち上げる。

「黒の縁取りに金の匠線、中央に嵌め込まれた黒のガラス」それは  
一目で何かわかる代物、即ち

仮面

一瞬、映画「MASK」の緑色の仮面を思い浮かべたがあんなふざ  
けた印象は見受けられない。

逆にこの仮面を持つと感じる不思議な情景は何なのだろう。まるで急げ！急げ！と急かし掛ける様に心の何かの内側から喰い破るうとする。それは、飢餓感によく似た衝動。

私は何の躊躇いも無くその仮面を顔に当てた。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

今この場には3人の人間が居る。私、皇帝、それに母上だ。逆に言えば3人しか居ない世界。この地平線の先まで見えるような黒い世界の中3人だけが異分子の様にポツンと浮いている。それは可笑しな光景だ。誰かが此方を見れば思わず目を見開くだろう。唐突にマリアンヌが口を開く

「ルルーシュずいぶん見なかった間に大きくなったわね」

それはただの社交辞令といえればそれまでだ。だがギアス使い（意思を押し通す者）の間には必要な会話だ。

「母上も10年前と変わらぬ姿、息子として嬉しく思います。ああ、そういえばギアスで人の魂に住む貴方はあの時から年を取らず、<sup>グラウレンク</sup>永遠にその姿なのでしたね。実年齢を気にされる女性に対してずいぶん無礼な話をいたしました。」

親に返す言葉とは思えない悪辣な言葉が丁重に返される。

その言葉に思わずマリアンヌの手が握り締められたのが御愛嬌か。

「己の母に向かってその態度かルルーシュ、親の偉大さその体に刻み付けねばならんようだな」

「息子も娘も捨てた貴女方が今更親面ですか？厚顔無恥にもほどがありませんね」

又しても2人の間に険悪な空気が渦巻く。その空気を砕くのは変わらずマリアンヌ

「あなた？そんな話を話すためにここにいらっしやったのですか？」

呻くシャルルにマリアンヌは話を続ける。

「まずはこの場所について話をしましょう。ルルーシュ貴方もそれがまず知りたいのでしょ？」

頷くルルーシュを見ながらマリアンヌは語り続ける。

「ここに見える黒い地平はこの世とあの世の狭間、別名『三途の川』と呼ばれる場所です。死を迎える全ての生き物はココを通り「あの世」即ち「世界樹」（アーカイブ）に吸収され情報の存在になり魂の残骸はエーテルとしてこの足元の三途の川に流され再び人間として生れ落ちていく事になります。」

「つまりここはまだ世界と世界の狭間という事ですか？情報として自分という存在が在ったと固定される前の状態。死んだのでも生きているのでもなくただ在るだけの宙に浮いた状態」

「ええ、その通り。普通はここに留まる事はできないわ。でも私達は別、現世で死を迎えたわけでもなく、この場所に居るから死ぬ事もない、そしてアーカイブ（神）が私達を追い出した以上私達が神アーカイブ以上の存在にならないと現世に帰ることも出来ない。故に私達に出

来るのはこの場所から世界をアーカイブを通じて見守る事だけ」

マリアン又は笑う悲しい微笑みをもって。そこに在ったのは慟哭なのだろうか？死ぬ事も出来ず、逃げる事も出来ず、触れる事も出来ず、関わる事も出来ない。何も出来ないのに見る事だけはできる。いや違う。見ざるえないのか。この孤独な世界に溺れてしまわないように常に世界を見守っている。それはとても悲しい世界

「うふふ。そんな顔しないでこんな私達にも優しいのね。あなたは。これは私達に与えられた罰なのよ。」

皇帝の顔に優しい手が添えられる。そこにあったのは悲しい笑みではなく困った子供のような優しい笑み

「私達が目指した 思考エレベーター（アーカーシャノツルギ）はね、死んだ人とも世界中の人間とも思考と記憶を繋げて人間から個人という概念を破壊して人類を群体に導く事を目指すものだったわ。

嘘を嫌って

負の連鎖を嫌い

奪い合いの連鎖を嫌い

差別を嫌い

故にそれが人間であると認め。人間を嫌悪した私たちは、結局集団という全体意思に全てを委ねようとした。

個人であるからこそ集団の意思に反し

個人で生きれない。だから集団に従わざる得ない

集団の中に居るから安全を得て

集団の意思で他者を従える

同一にして反因の要素

人が1人である事によるジレンマ<stand alone complex>

正にその通りね。

でもね結局そんな物は建前

私達が本当に欲しかったのは死んでしまった人たちともう一度会いたいという願望だけ。でもねココに辿ついてアーカイブから会いたい人に会ってやっと判つたの『死者は蘇らない』『そんなおかしい願いを持つ事は出来ない』『記憶だけの死者なんてただの声を録音した機械と何もかわらない。』『うふふその時になってやっと貴方の

『何も変わらないそんな世界を私は望まない。』

その本当の意味を知つたの。ええそうね。話しかけても同じ答えしか返えつてこない。

新しい記憶を持つ事も思う事も出来ない。そんな事判つて居たのに一番判つて居なかつたのは私達だったのね。だからこれは罰 願えない願いを持つてそれを実現させようとした私たちに下された

『世界の意思（神罰）』

之こそが私たちに下されるべき罰なのだから。」

悲しい微笑み。まるで今にも壊れてしまいそうな儂いガラスの微笑み彼は思わず左手で彼女の右手を包み込み、右手でその壊れてしまいそうな微笑に添える。



「その顔で言っても説得力がまったくありませんよ。貴女は昔のよ  
うに優雅に華麗に世界を眺めながら私たちの成長に微笑みを浮かべ  
ててください。それが貴女が一番美しい瞬間なのだから」

マリアン又は息子から送られたそんな言葉に目を瞬かせクスリと笑い

「そんな口説き文句妙齡の人妻におくつていいのかしら？私はそん  
な子に育てた覚えは無いのだけど？」

「口説き文句は相応しいときに相応しい人に贈るのが慣わしなので  
すよ。例えそれが妙齡の美女だったとしてもね」

2人の空気が桃色に染まりかけているのは主人公補正のお陰なのか  
皇帝の魅力なのかとりあえずその2人の桃色の世界を面白く思わな  
い人間がここに2人

「ンッホン」

「いい加減にしておけルルーシュ」

振り返る皇帝の目に映るのは1人の少女。我が相棒。我が共犯者。  
我が道化師。数多の意味を持ちその全てを肯定する不死の魔女

「C・C」

.....

私は右手を下ろす勿論仮面を持ってだ。漫画やドラマのようにこの  
世界は安くは無い。

一瞬でも世界が変わるような予感を持って、仮面を付けてしまった自分の未熟を恥じる。

さて、この箱に何の手がかりもなく入っていたのは高そうな仮面一つ。

なら尚更この仮面を持ち主の所に返さなくてはならない。

さて、だがここで問題になるのは宛先が私宛になっていたという点だ。

誰が私に何の目的で送ってきたのかという点であるがこれは、封筒が入って居るのだから中身を読めばいいだけであろう。

私はその白の私宛の封筒を手に取り、封を切り中に入っていた手紙を取り出す。

中から出てきたのは白の便箋

まず、書かれていたのは綺麗な達筆で書かれた詩意味の良く判らない詩だ。何か意味のある文章なのだろうか？手紙を裏返してみるが他には何もかかれていない。

「ただこの詩だけ書かれてもな・・・。」

私はこの手紙に呻き声をあげるしか出来ない。

何も送り主に関しての情報が書かれていないのだから。

いや、最後の一文は詩ではなく名前か？

『我が愛しき共犯者に捧ぐ C・C』

いやそれはないだろう幾らなんでも「炭素」という名前は無いだろう

う。

私はその文章を読むことから送り主を調べる事を諦めた。

「仕方ない明日郵便局にいつて調べてもらうか……。」

私はそう決めて布団を敷いて眠る事にした。

机の上におかれた白の便箋には書かれていたのは1つの詩。  
2000年の時を越えて詩われ続ける、神秘の詩

「素に銀と鉄。 礎に石と契約の大公。 祖には我が大師シュバイ  
ンオーグ。

降り立つ風には壁を。 四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に  
至る三叉路は循環せよ」

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

「 A n - f a n g  
」

「 告げる  
」

「 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、  
抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ  
！」

我が愛しき共犯

者に捧ぐ C・C

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

私は驚く以上に苦苦しく思いながら、目の前の魔女に追求した。

「C・C お前マリアンヌとシャルルが生きている事を知っていたな？」

「ああ。知っていたよ」

「なら何故！」

その顔に浮かぶのは嘲笑。

「勝手に彼らが死んだと思っ込んだのは君だろう。いつ誰が私にシャルルとマリアンヌが死んだのかと尋ねたかね？」

つまり、この共犯者は知ってたのに聞かれなかったから言わなかったのである。実に忌々しい『魔女め』。王の顔が歪む。だが次に吐かれたのは溜息、こんな事で怒ってもせせら笑われるだけだ。この魔女は何時もそうなのだから。

「ついでに言えば私は知って居たがC・Cは知らないぞ？」

「何を言ってるのだ？C・C？」

「うふふ。」

悪戯を成功させた子供が浮かべる無垢な笑顔。これ以上追求してもこの魔女は何も答えないだろう。それが濃いこの数年の付き合いで良く判った事の一つだ。王は追及を諦め視線を他の2人に向けた。

「それで？道化師に騎士にそして皇帝が一同に会して、今からもう一度世界を取り戻しに現世にでも帰るんですか？」

「違うな、ルルーシュ。今回私達が一堂に会したのは貴様の責よ。」

「我が責？」

「そう。私たちをココに送り貴方の自身を殺し、多くの人々を殺してしまった贖罪を果たしてもらった事にしたの。」

それは、彼の責任。彼は彼の復讐の為に日本人という国民を使いそして、その多くを道連れにした。彼が復讐を望まなければ奪われなかったかもしれない多くの命その事実が彼を苦しめる。

「何をさせるつもりなのだ？」

しかし、彼は迷わない。

穏やかな暮らしを奪われ、幼き地獄は昏くくらく燃えた。手に入れたのは世界を変えうる王の力。

偽りの仮面に身を隠し、只一人世界に異議を唱える。

望んだのは安息の未来。

得る為に失い、無くした物の重さに震え、共犯者と哀しく嗤う。  
無垢なる善意は禍いわざわざいを呼び、和解の思いは惨劇となる。  
しかし、行く道に退路は無い。

そうあの時あの瞬間に私の中の私の道に退路は無くなった。

その全てを受け入れ

その全てを背負い

その全てを抱いて

一人王の座で悲しく笑う

そうそれこそが私の望む、私の人生

- - - - -

布団に入ったのに眠れない。目を閉じても頭に浮かぶのは漆黒の仮面と便箋に書かれた詩の事ばかり。

眠気は一向に訪れない。何時もの規則正しい生活のお陰で何時もなら直ぐにでも眠気が襲ってくるのだが

一向にその気配が訪れない。思わず彼は溜息を吐く。これでは明日の朝寝過ごししてしまいそうだ。

「あの詩は何だったのだろうか」

そんな言葉が思わず口から出る。そして、再びその瞳は閉じられる。それに続いて口から零れ落ちるのは先ほどの詩

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバイオ

ーグ。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

桐箱の底から赤い光が静かに溢れ出す。もし彼が目を開いていたのならその光景に驚愕しただろう。だが残念なことに彼は静かに目を閉じて詩を歌い続ける。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

赤い光は円を描き複雑な光跡を描いていく

「 告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

不意に仮面が静かに宙を舞い赤い円の中央で静止する。眠る彼と宙に浮き赤い光に包まれた仮面それは何処かの絵画の光景

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

円が一際赤い光に包まれる。

汝言霊を纏う七天、

輪より来たれ、天秤の守り手」

口を開くのは魔女。

「何、大した事ではない。ただな少し遠くに行つて来てくれればいいんだ。」

「何？」

「遠い場所？なんなのだそれは？そもそも、この場所に距離など関係があるのか？」

「つまり簡単に言えば貴方に異世界に行つて貰う事にしたの」

「な！！」

「そこで貴様は生を成せ。私たちの居ない世界でお前だけの人生をだ。ルルーシュ。」

ゆっくりと彼の体が宙に浮いてく彼の驚愕は言葉に対しての驚愕なのか？

宙に体が浮くという体験のせいなのか？

それとも新たに現れた4人の人影のせいなのか？

「結局君には1度もチェスで勝てなかった。もし、もう一度チェスをする機会があれば今度は勝たせて貰うよ。」

「兄さん。兄さんには幸せになつて欲しい。いえ、幸せになつて貰わなきゃいけないんだ。僕を救つてくれた兄さんが救われない未来



を僕は認めない。」

「私はルルーシュ兄様を恨みません。だってルル兄様が私の為に泣いてくれたのも、あれが本心でなかったのも私は知っているのですから。」

「大丈夫だよ。ルル。どんな暗い闇の中にあっても必ず朝は来るんだよ？明けない夜は無いんだから。」

驚き思いは頭を駆け抜けるそれなのに口から出るのは吐息のみ

クロヴィス、ロロ、ユファイ、シャーリー

私が殺してしまった大切な人たち

「私たちの願いが貴方を歪めてしまった。なら、私たちは貴方にもう一度やり直す機会を送るわ。」

私たちにはこんな事しか出来ないけど、願えるなら今度こそ幸せになりなさい私たちの自慢の子

ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア

「ルルーシュ。私に1度でも勝った以上1度たりとも敗北する事は許さん。貴様のその背にはブリタニア数百年がある事をおめおめ忘れるではないぞ！」

その光景はルルーシュという男の望んだ光景。誰も笑えない優しい空間。男の目に涙が写った様に見えたのは目の錯覚か

「今度こそ幸せになれよ。我が共犯者」

「父上、母上、ユファイ、ロロ、クロヴィス、シャーリー、C・C  
皆、感謝する。……………行って来ます」

その男はゆっくりと上空で暗闇に飲み込まれていく。

「ああ。それとあちらの私によろしく頼む」

最後に響いたのはそんな声だった。

## 色を変える世界（後書き）

前書きでも書きましたが

えらく変わってます。呪文詠唱とか

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

「！」

「言霊を纏う7天 輪より来たれ、天秤の守り手」

いや別に変える必要もなかったのですがこんなくそ永い詠唱を1度  
読んだだけで全部覚えるってどうよ？って話で

ついでに

言霊を纏う7天のほう言葉を操るゼロに相應しいかなとw

詠唱自体に問題ない程度に改変しました。

次は能力と釈明です。

## 能力と釈明（前書き）

1話文章などの推敲中なのですが正直大変スギマス

何で、残りは後日やります。（推敲だけで既に3時間半  
メモ帳なんかを書くんじゃないやなかつたよorz

## 能力と釈明

まず初めに

「少雨」

と申します。

ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ

不快に思われて文句言いに来た方々

ホント本気でゴメンナサイ

反省は作者もしております。後悔（公開）はしたら負け？（もう負けてるし気にしたら負けか）

この小説を読むにあたりルルの能力ときっかけなどなどツラツラ書かせていただきます。

1. 書こうと思ったきっかけ

「運命を貫く漆黒の螺旋」 作者：クラウン・クラウンさんの王の問答見てセイバーvsアーチャーvsギルvsルルの王問答が見たくなりました。つまり「漆黒の螺旋」の王問答を読んで、ルル参戦させたい！！から始めました。

2. 作者ルル贔屓です。

ぶっちゃけルルが「ククク、やれるじゃないか！！」「朱雀並みの戦闘能力と私並みの戦略眼だ」とか「撃つていいのは撃たれる覚悟がある者だけだ！」

と「原作台詞をルルに言わす」と「ルルお得意の大逆転」が最大の目的です。

3. だからルル無双です

作者は FATE と ギアス 好きなのですが・・・えーアーチャーとセイバーの活躍がない。

とりあえず現段階で書いた戦闘シーンすべてルルが美味しい所総取りしてます。いやアーチャー反応しようよ心眼（真）Bは張子の虎ですか！！なんか書いててアーチャー盛大なやられ役にorz セイバーより酷い目にあってるよ幸運Eは伊達じゃない！

4. 作者桜ルート及びホロープレイしてません。

桜の扱いに頭抱えています。（つまり裏設定と性格しらねえ！！）原作崩壊ご了承ください。

しかもその癖にハサン・サッバー八出す予定

5. 元ネタに関して

作者ニコニコ動画の「第6次聖杯戦争」とか見てますのでその辺りの影響や「漆黒の螺旋」の影響受けてる気配というか作者が既に現段階で

「漆黒の螺旋」と似過ぎてる

と頭を抱え諦めて開き直ってパクリながら書いてるので気にしたらいけません。2次創作なんで多めに見てください。

文脈とか文章とか単語とか

6. \*最重要\*

この作者処女小説では在りませんが完結した小説を書いた事はありません。また、公表した事ありません。自信ありません。

### 3せん＝参戦（違）

ここまで読んで問題が無い場合、ルルの能力に移ります。

### ルルの宝具

1・ゼロの剣 D

レンジ：0 - 1

対人宝具

この剣はゼロの最後に使われた誇りの剣。その剣は目的を達成するその時まで決して折れない。

2・王のギアス「絶対遵守」 E x

レンジ：0 - 1000

対軍神具

各個人に対してたった1度しか効果は無い。が、そのギアスは神の意思すら捻じ曲げる。神性B以上でレジストが可能になる。

3・変わる世界 D

レンジ：0

対人宝具

マスクを装着する事によりゼロになり、技能の上昇の替わりに気配遮断のスキルを失い幸運もランクダウンする。

#### 4・Mask of Zero D

レンジ：0

対人宝具

この仮面はルルーシュと朱雀にしか装備できずこの仮面の素顔を知る事は如何なる大魔術、魔法を持つても不可能である。

また、魔術、大魔術を使つての追跡、監視、視認を妨害する。

宝具に関しては1は斧剣のイメージ、3、4は問題ないでしょう。  
2は後述

サーバント アサシン ルルーシュ<sup>II</sup> デ<sup>II</sup>ブリタニア

筋力 評価値せず

耐久 評価値せず

素早さ 評価値せず

魔力 評価値せず

幸運 B

宝具 E x

話術 A

言葉巧みに相手を惑わすスキル。この稀代のペテン師は王すらをも欺く。といった能力である。

戦略 A

数万の軍勢を思つがままに操るスキル

戦術 B



局地戦における指揮能力

カリスマB

皮肉屋だが誰からも好かれたこの男に相応しいカリスマ

天才

全ての技能に、2ランクアップの補正を受けている

魔眼A++

ギアスがこの世界の形に対応した能力。如何なる精神干渉系攻撃もこの魔眼の前には意味を成さない。

気配遮断B

アサシンとして召還された結果ランクアップした能力。元々能力が低い上この気配遮断Bがあればサーバントは誰も彼がサーバントだと気がつかない。ただしギアスを発動時は気配遮断がランクダウンする。  
又、正規召還者が調べれば一目でサーバントか判る。

神性E

神を知り神を理解したこの男は神性を得ている。

騎乗E-

一般的な騎乗の才能。（感想により指摘いただきました。ありがとうございました。ありがと

うございます。)

ということと近接戦闘は即死というコンセプトで組んでいます。なので、気配遮断とギアスの際どいバランスの上で綱渡りを予定してギアスは破格の宝具になりました。

追加で報告

\*冬木市 神戸市に

\*ニコニコ動画に音楽作って流しながら読んでもらおうかなどと考えてます。が、只今ニコニコ動画の使い方が悪戦苦闘中(敗戦濃厚コードギアスの作業BGMでも聞きながらドウゾ)

\*何故かギルガメッシュの神性がB+になっています。仕様です。

\*一応73話構成の予定(72話+この1つで73)

以上了承できる方

本編をどうぞ。

## 能力と釈明（後書き）

この文章も推敲と改行とかまだまだ必要なのですが

1話目が3時間半かかっても終わらないので飽きました。後日修正  
します。

ついでに一応1週間に1回ぐらいの更新を目指します。（この2つ  
書くのに約16時間orz

## 邂逅（前書き）

まず、初めにゴメンナサイ

実はこれ書き終わってない……。

この後にギル&言峰の黒幕話と2人が名を名乗り握手するシーンを入れるつもりだったのですが

Q・言峰の口調って

「ああ、存分に楽しもう・私の命か世界が終わるその日まで。」

こんな不自然だったっけ？

A・取りあえず聖書の言葉でもでも出して違和感をごまかそうと思っただのですが良いのがない!!今週中に書き終わらない

ということ取りあえずギアスまでは掛けたしいいやと思って投稿

すみせんorz

## 邂逅

俺は、痛みを堪えながら目を開ける。酷い頭痛だ。頭の中を引つ掻き回されたような鈍い痛みが頭を駆け回る。起き上がろうとするが体がふらつく。クソ、これだから軟弱な体は・・・。

何とか体を起こし体を起こすと、まず目に付くのが私の体の下の布団で眠る一人の少年。そして傍らには黒の・・・私の仮面。これはスザクに預けたはずだが何故ココにある？

恐らくC・Cが何らかの手段で送りつけて来たのだろう。

だがせめて状況説明ぐらいは欲しいものだ。他に手がかりになりそうなものを探すがあったのは机の上にあった良く判らない詩と桐箱ぐらいなものだ。だがここにあった手紙に書いてある

「我が愛しき共犯者に捧ぐ C・C」

恐らくこの手紙は目の前の少年の部屋にある以上C・Cが目の前の少年に送った物だろう。

ならば目の前の少年がC・Cと関係している可能性は高い。ならば起こして尋ねるのみだ。何か騒ぐようならばギアスで縛って話させるまでだ。

俺はまず目の前の少年を起こす事にした。

.....

誰かに揺すられている。私はゆっくりと目を覚ます。

いつもなら朝はスッキリ目が覚めるのだが今日はずいぶんと体が重い、そして目の前には見知らぬ青年が一人。

そこまで理解した瞬間昨日の光景が思い浮かぶ、瞼の裏に赤い光が

閃き、驚き目を開けた瞬間上から降ってきた青年だ。  
黒の髪、黒の制服、黒いズボン、そして一際目に付くのが

「赤い瞳？」

その瞬間その青年は驚いた顔をして辺りを見回し私の部屋の机の上に置いてあった鏡を見つけて歩みより鏡を覗き込み静止した。  
私は何か不味い事を言ったのだろうか？

その不自然な行動をみて私は一瞬考えたが取り敢えず上がり彼が誰だか聞くことにした。

「な・・・だ・・・なぜ・・・すが・・・みに・・・あが・・・  
・・・る？C・C」

C・C「炭素」？とりあえず目の前の青年が言った独白の端に聞き覚えのある単語を聞き取れた私は、目の前の青年と謎の贈り人と思われる人の間に関係がある事を知り尋ねる事にした。

「すまないが、いいだろうか？私は『柳洞一成』この寺『柳洞寺』の住職の次男だ。済まないが、まずその手紙の炭素さんとやはら君の知り合いかい？」

目の前の青年は一瞬きよとした顔をした後、目を見開き次いで押し殺したように笑い始めた。

何か私は又拙い事を言ったのだろうか？私が真剣に今言った台詞をリピートさせようとすると、その青年は笑みを押し殺しながら口を開いた。

「ああ知り合いだ。C・Cから元素記号の炭素に行き着くとはな、クククせめてイニシャルだとは思わなかったのか？」

言われて気がつく。余りにも達筆な筆書きの日本語に思わず日本語に直してしまったがその通りだ。確かに炭素という名前よりもインシヤルでC・このほうが正しいに決まっている。私は思わず呻き声を上げる。

「南無三」

すると目の前の青年はまた苦笑を浮かべている。遺憾ながらこの口癖が古いのは住職の息子としては、仕方のないことなのである。私は気を取り直し目の前の青年に続けて尋ねる事にした。

「それは兎も角私の所にその仮面が送られて来たのだが私はそのことという人に残念ながら心当たりがない。悪いが宛先間違いだと思うのだがこの仮面を持ち主に返してもらえないだろうか？」

私は布団の横に転がっていた仮面を拾い上げその青年に差し出す。青年は無言でその仮面を受け取る。その瞬間腕に引き攣った痛みが走る。思わず呻き声を上げなかったのは日頃の修行の賜物だろう。同時に、目の前の青年も膝を付き仮面を持った腕を押さえている。次の瞬間彼の手から仮面が飲み込まれる様に消えた。私は腕の痛みを忘れてその光景を呆然と眺める。信じられない。

物が人間の腕に飲み込まれるなんてそんな事聞いたことも見た事もない。

視線を上げてその青年の目を見るが私よりもその青年の瞳が見開かれた事が全てを物語っていた。

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

俺の仮面が腕に飲み込まれるのを見て私は思わず目を見開く。馬鹿なありえない。物質が他人の体の中に入り込むなんて聞いたことが無い。これも何らかのギアスの力なのか？取り敢えず情報が必要だ。

「とりあえず、まずどうやって俺がココに着たのか教えてもらえないか？」

私は目の前の青年に尋ねる。取り敢えずこの場所『柳洞寺』の情報とこの世界一般常識が欲しい。

その為にはこちらの情報がある程度漏らさないように当たり障りの無い会話をして、その会話の断片から聞きだしていくのがベストだ。

「ああ。どういえばいいのだから・・・単純に言えば私がその手紙に書かれている歌を詠んだら赤い光が閃いて君が降って来た・・・普通こんな事言っても信じられないだろうけどさっきの仮面の件もあるし、それ以外の説明ができない。」

なるほどやはりこの世界には特殊な力というものは無いようだ。そして、そんな魔術のような神秘は忌避されるものであるのも変わらないか。そして当然ながら仮面が腕の中に消える事もか

「つまり、赤い光と共に俺は個々に着たのか。なるほど」

俺は考え込む振りをして相手の反応を伺う。こちらが多くを話せば何処でボクを出すか判らない。故に相手に話してもらおうのが一番だ。故に居心地の悪い沈黙を生み出す。

「ああ、ところで君は日本人でいいのかな？日本語喋っているし、黒髪だし。」



日本人・・・

「ああ、俺は日本人だよ。という事はここは日本国でいいのかな？」

「ああ日本の兵庫県神戸市だよ。」

日本国に対する否定はない。すなわちこの世界では日本は日本として独立しているのか。

また、ココが神戸である事もわかった。とりあえずある程度の基本情報は集まった。なら私がココに来た赤い光とやらを調べるか。

「C・Cはその桐箱と仮面それにそこに置いてある手紙以外は何も送って来なかったのかね？」

「それなら、もう一通の便箋が在ったよ。机の上に置いてある」

机の上にもう一通の便箋。俺はそれを躊躇い無く封を破り中身を開けた。少年が何かいいたそうな顔をしているが問題あるまい。おそらくこれは私に送られたものなのだから。

手紙を一瞥して私は溜息をつく。なんて女だ。人を殺し合いのど真ん中に放り出すとは。しかも、目の前の少年も一緒に巻き込むとは。

- - - - -

ルルーシュへ

恐らくこれを読んでいるという事は成功したと言つ事だろう。

まず、貴様にやってもらつ事がある。聖杯を手に入れる事だ。

何故かと言つのなら貴様はこの世界の人間では無い。

故に貴様という肉体は本来この世界に存在し得ない。だがそれを聖杯を使って擬似的に再現した

状態が今のお前の状態だ。だから貴様は神戸市という町から離れる事も出来ず。

お前の召還主である一成が死ねば自動的にお前も死ぬ。

だから、貴様は聖杯を手に入れなくてはならない。

だが聖杯の力は今恐らく7人いや7体の英霊と呼ばれる存在に分割されて配分されている。

ココまで来れば貴様なら判るだろう？他の7体の英霊を殺して聖杯をとつと手に入れて会いに来

い。私はロンドンにいる。

C・C

P・S

ヒントをやるうその寺の倉庫を漁れそうすれば何か戦争に必要な情

報の一つや二つ出てくるだろう。

-----

相変わらず重要な事は何も言わず語らず自分で調べろか・・・あの魔女め。私は目の前の少年に一瞥を投げかけ考える。この少年は明らかに一般人だ。戦場に出る覚悟も出る意思もない者だ。それを戦場に出すのは私の『撃つて良いのは、撃たれる覚悟のある者だけ』という信念に反する。

ならばこの少年には遠くで隠れていてもらうのが一番か。だがその為には、ある程度事を話す必要がある。何処まで話すか・・・。

「何が書いてある？」

少年が私に尋ねる。その目には、探るような視線。

表情を読まれたのか？いや、易々と私の表情を読むこの少年が人の思考を読むと言う点で優れていると言う事か。中々少年の割には優れた才を持っている。

「いや、俺への手紙が入っていただけさ。」

何もないような振りをして惚けて見る。恐らくこの少年には

「嘘だな。これでも生徒会長をやっている身でね、「他人の裏」と「観察される事」には敏感でね。少なくとも貴方が先ほど一瞬見せた表情の中には怒りと私を計る視線があった。」

やはり通じないか、だが未だ未熟。ここで全てのカードを切るとは若いな。

「ああその通りだ。だが先ほども行った通り『この手紙は俺に送られた手紙』であり、それを君に見せる義理を私は感じないが？」

言葉に詰まる少年。

不法侵入などと言うのならすぐにでも出て行くし、これで彼が私から手紙の中身を教える様に強要する方法は失われた。故に方法は一つ

「すまない。言い過ぎた。だがその手紙には私に関する何かが書かれているのだろうか？ならばそれを教えてもらえないだろうか？」

良い反応だ。優秀な人間ほどプライドが高い傾向にあるがそれを素早く抑えてでも最善の行動が取れるとは、訂正しよう人を読む事だけが優れているのではなく

「ふむ、良い判断だな。C・Cが優れた人間マスターを選んでくれて助かった。」

私は私から初めてカードを切った。

- - - - -

居酒屋の店主？召還者？主？一番合うのは召還者か。魔法などと言う眉唾なものを私は信じないが、目の前に居るいきなり現れたこの青年とその手に消えた仮面を見る限り信じざる得まい。ふむ、つまり神仏も意外と本当にいるのかも知れん。それは兎も角、今の問題はこの青年は私が呼んだのか？何の為に？ふふ意外と3つの願いをいうとそれを叶えてくれるのかな？真つ黒な服に真つ黒な髪に赤い瞳。まるで悪魔のようだ。変りに魂を寄越せとか

「ところで、少年命を掛ける覚悟はあるか？」

余りにもタイムリーな質問に私は凍りつく。それを気にもせず青年は続ける。

「今まで君が生きてきた世界は誰も死ぬ事もない普通の世界だっただろう。だが今このときから君は生きるか死ぬかという戦場のど真ん中に投げ出された。それを無常だと嘆くのも何故自分なのだと嘆くのも構わない。そしてその引き金を引いたC。この知り合いとしての謝罪を俺はしよう。だが、今君は生きるか死ぬかという瀬戸際に立っている。」

青年は私を見る。まるで試す様に問うように。

否

これは試されている様なのではなく明確に私の底を計られている。停止した理性の代わりに私の本能が冷静に答えを導く。

「ならばこそ俺は君に2つの選択肢を示す。1つ目は何処までも逃げる事世界の果てまでも追っ手が来る限り永遠にだ。2つ目は戦って全てを打ち倒し一人戦場に立つか？君にその覚悟はあるか？」

青年の赤い瞳が私を射抜く。それは心臓すらをも穿つような真つ直ぐな視線。ああ、どうして私は目の前の青年を唯の青年だと思っただろう。これほどの風格をこれ程の眼力をこれ程の問いかけを出来る人間が唯の人間である訳があるまい。私の思考と反対に言葉は宙を舞う

「私は普通に生きてきた。今までも、これからも、それが一生続くものだと思っていた。だが今解った、それが幻想である事が。ああ、現実はこのなにも簡単に変わる物なんだな。君が嘘を付いてないのは君を見れば解る。もし君が嘘を付いているなら世界中の人間の嘘なんてどんなにつまらない嘘か。それでも私は一つだけ譲れないものがある。それは、

「おーいー成朝餉の時間だぞ起きてるかー」

その声には宙に浮いたような高揚感から冷水を浴びせられたかのように冷静な思考に戻る。

まずい部屋の中見知らぬ他人と2人だけでは兄に何て言われる事が焦りを浮かべる私に比べて目の前の青年は落ち着いた様子でこちらを見ている。これが貫禄と言うものか。

「おーいー成寝てるのか？」

兄の声が近づく。もう私の部屋の傍まで来ているのだろう。その足音が聞こえてくる。私は打開策を目くらせるが思いつかない。その視線は宙を落ち着きなく彷徨っているのが自分でも理解できる。その時目の前の青年が腕を上げて扉を指す。私はそれを見て即座に理解して起き上がり扉に向かい扉を開けて閉める。ちょうどその時兄が曲がりから私の部屋の前に出てきた。

「おお。起きてたのかなら返事をせんか。」

「寝起きだったもので大きな声を出せなかつたんですよ」

スラリと滑る様に嘘が口を出てくる。私はこんな平然と兄に嘘が付

ける人間だったのだろうか？まるで彼と会話を交わした僅かな時間  
の間に別人になったようだ。兄は苦笑いをしている。

「ふむ、ではさっさと服を着替えて朝餉に來い皆腹をすかして待つ  
ているぞ」

「解りました。兄さん」

兄はそういうと背を翻し歩いていく。そして唐突に立ち止まり意味  
深に笑い爆弾を投げる。

「そうそう中にいる彼女によろしく。一成を一晚でここまで変える  
のだから相当いい女だろうが今回は目を瞑っというてやる。しかし、  
ちゃんと今度紹介しろよ。」

ガハハハと笑いながら兄はノシノシという音が聞こえそうな足音  
を立てながら曲がり角を曲がり食堂へ向かっていく。私はその場に  
背を持たれかけるようにしながら独白する。

「まったく、兄さんは適わないな。」

その足音が消えるまで私はその背を扉にもたれ掛かり脱力していた。

「とりあえず私は今日は図書館に行つてこの町の地理を調べておき  
たい地図のようなものはあるかい？」

脱力した体に渴を入れて部屋に戻るなりに、青年は椅子に腰掛けてそんな事を言ってきた。

「いや流石にこの町に住んでるから地図は持っていないな。ところで戦争の話をきちつとしてもらえないか？」

私はその場に正座してその青年を見上げる。

先ずは見極める事

それすらせずに答えを導いた所で何も変わらない。寧ろ、何も見ずに解決する事など百害在って一理無し。故に私は青年に教えを請う。そこにプライドは要らない。プライドは目を曇らせるだけでしかないのだから。

「知らない」

一瞬その言葉に耳を疑う。知らない？何故？

私の疑問が顔に出ていたのか青年は言葉を続ける。

「君の聞きたい戦争とはルールの事か？それとも戦場なのか？戦う相手なのか？その全てを含めて俺は何も知らない。ただこの手紙に書いてあるのは簡潔だ。」

14人の人間同士の殺し合い

最後に勝ち残るのは2人の1チームのみ

片方が死ねば、もう一人も死ぬ

故に、私はこの場所の地理を速急に調べ如何なる状態でも対応できる体制を作る必要がある」

確かにそこに私の知りたい情報は無かった。ならば、今は如何なる



状態にも対応できるように備えるのみか。私はどうすべきか。殺し合いがいつ起こるか分からない現状で外に出るのは危険か？だがこの寺に籠るとしても情報が少なすぎるどうすべきか？青年は椅子を立ち上から見下ろすように話を続ける

「君は学生だろう？そのまま学校に行きたまえ。生徒会長が急に休むのは人目に付く。このようなゲリラ戦において日常行動から逸脱する行動は不審を集めるだけで逆効果にしかない。だが君が周りを警戒するのは致し方が無い事だ。故に君に便利な保険を掛けさせてもらおう。」

青年の瞳が赤く鈍い光を放つ。それはまるで鬼火のように赤い残光を彼が1歩ずつ近づく度に目に焼きつける。おもむろに青年は腕を掲げそして宣言する

「ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアが命ずる。一成。君は何時もと変わらない様子を装い、危険を感じればそれに対して冷静に思考せよ」

赤い光が激しく再び輝き 私の頭の中を何か駆け抜ける。その痛みの中で私は彼がルルーシュという名であることを知りそして意識を失った。

## 邂逅（後書き）

次の投稿は来週中には多分きつとその時には修正も完了してるはず

因みに次は、伏線のための地理解説となる予定 $\parallel$ 短いと思います。

戦術論（一応完成）（前書き）

4話の話が思いつかない図書館 学校 町で情報屋さん達 ギアス  
というながれは決まっていたんですが・・・。

学校と図書館での武器の絡みがかけないorz

いずれチマチマト書きますorz

ストーリーがまた少し変わった・・・。まあいいや

一応これで完成ということにします。何か伏線入れ忘れてたらココ  
に追加予定。

といううか明らかにバゼットさんの描写削除に言葉も1言のみ  
手抜きです。ハイ

## 戦術論（一応完成）

ふむ・・・私は本を読む手を止める。朝方通りすがりの男に貰ったサングラスを触れながら物思いに耽る。この数時間でこの世界はやはりC・Cが言っていたとおり「異世界に飛ばされたと言う事実」を私は痛感する事となった。まず、言語としてこの国では日本語が使われており文献なども日本語のものが大半で英語の物は殆どこの図書館の中には無かった。私の母国語は英語であり日本に居た為日本語を読むことに不自由はしないが英語の文献を読む方が速いのは事実だ。また、データの集積化もブリタニアに比べれば兎戯に等しいレベルだろう、お陰で調べ物をするのに一々全ての本を読まなくてはならない。はつきり言って時間の無駄としか思えない。これほどまでに本来の歴史とかけ離れた理由はいくつか考えられる。まず

ブリタニアが存在しない事

これはアーサー王の死に端を発する。ブリタニアの歴史に寄ればアーサー王はソールズベリーの戦いの際駆けつけたランスロットにより死を免れ、死んでいった多くの騎士を痛み国の名前をブリテンからブリタニアに改名し長き王国を作り上げた事になっている。だがこの世界ではソールズベリーの戦いにおいてアーサー王は戦死しておりそれによりブリタニアという国は起こらず、王国ではなく立憲君主制の国が興る事になる。

次に  
サクラダイトが未だに発見されていないこと

これにより日本が持つ戦略的価値は極端に低下し東洋の島国に成り下がる。それでも中華連邦をあそこまで追い詰めた日本軍の軍事的能力は驚嘆に値しよう。が、アメリカ合衆国に破れ結局はアメリカの属国の立ち位置になるのはこの世界でも私の世界でも変わらないうた。逆の可能性として、この異世界にはサクラダイトが存在しない可能性もある。

また、先述したがブリタニアとEUと中華連邦という3大勢力が生まれず多数の小国がひしめく事により言語統一が進んでおらず情報内容の統一がおこなわれていない。それにより文献などを見ても同じことを其々の言語で同じことを書いている文献が多く見られた。またそのような知識の集約不足から科学技術という面では50年はブリタニアから遅れているだろう。だが1つだけ驚くべき兵器がある。核兵器だ。フレイヤはサクラダイトとプルトニウムで核融合を実現したが圧力を加える事により核同士を融合させるというプランは見たことがない。副次効果として中性子による2次被害を期待できるがその半面中性子が残留するため浄化が難しい。扱いは難しいが威力には目を見張るものがありなんらかの事態になれば考慮すべきであろう。

科学技術の遅れは未だに、戦争の中心を「戦車と歩兵による制圧戦」と「航空戦力による拠点破壊」を軸とする古い戦術論と戦略を基本方針としている。私にとってこれは幸いと言うべきだろう。兵器が未熟である以上「物量戦術」即ち大量の人員と大量の物量を運用する事が大きな意味を持つ。そして兵站と多数の兵を多数の部隊を手足の如く扱いこなすのはゼロであった私の真骨頂と言っても過言ではない。それには先ず腕の立つ「黒の騎士団」の代わりと呼べる指揮部隊が必要だ。そしてその部隊に武器を調達する資金源この

2つが今現在の最大の課題だろう。

私は考える。今度の世界で私は幸せになれと願われた。死ぬ事を認めないといわれた。ブリタニアを背負えと命じられた。そして暗い夜を歩いてきた私に光を抱けと願ってくれた少女が居た。ならば私は今度は間違えずに光の道を歩もう。誰かの犠牲の上の未来ではなく誰も犠牲にせずには私はこの戦いに勝利して見せよう。

だから

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

私は学校に着くと相変わらずの彼が居た。

「おはよう。一成」

彼は「衛宮 士郎」人の良さそうな顔つきの苦労人であり私の親友だ。昨日からのあまりにも現実から掛け離れた事態が夢であったかのようなそんな錯覚を覚える。そう、錯覚なのだ。あれは間違いなく現実であったと現実逃避すら彼の力はゆるしてくれない。

「大丈夫か？」

此方の表情を読み取って対応してくれる親友に感謝とそんな風に心配させる自分に自己嫌悪を覚える。

「ああ、すまん。昨日から色々あったんでな少し疲れているのかも  
しれない。」

八二カミながら苦笑するとタイミング良く鼻血を出したクラスメイトが何人が居たようで教室の中は少し騒然としている。同時に複数  
の人間が鼻血出すなんて珍しいな・・・。

「それならいいんだが、俺で手伝える事があれば何時でも呼んでくれよ。」

そんな親友の優しさが身に染みる。だが彼をこの戦争に巻き込むつもりは無い。だから私は彼が見て安心するような笑みを浮かべる。

「ああ。その時は遠慮無く手伝ってもらおうさ。」

苦笑とも頬笑みとも言える笑い方に彼が目を見張る。む？失敗したか？

「とりあえず保健室に行こう。疲れてるんだろ？」

私は病人か何かなのだろうか？慌てて立ち上がり私を保健室に連れて行こうとする親友に苦笑する。それとも自分はこの1日でそれほどに慌てられるまで変わってしまったのだろうか？明らかに明白だな。

「土郎。男子3日見ずからに渴目して見よ。という言葉知ってるか？」

私の強い視線に土郎は驚きそして笑う。やはり土郎は笑って居るのが1番良い。彼の笑みはどんな人間をも惹き付ける愛嬌がある。桜と土郎のコンビだと威力は相乗だ。まるで桜に日本人が視線を向ける様に土郎の笑みが誰をも惹き付け桜の華やかな笑みに魅入られる。惜しいなもし2人が1学年下だったなら生徒会長と副会長の座をセ

ツトで譲ったのに。

そんなつまらない日常を実感しながら私と彼の雑談は授業が始まるまで続いた。

- - - - -

「私は戦争が出来るだけの兵器を買いたいのだが。この町で一番品揃えと数をそろえられる武器商人を何人かに私が信用できる人間だと紹介して欲しい。それと人材屋も大人数を動員できる所を教えてください。もらえるかな？」

「判った。連絡は此方で入れておこう。明日この電話番号に電話を掛けてきてくれ」

赤い瞳に魅入られた目の前の広域暴力団の幹部の男は、自分の手帳を破って幾つかの電話番号を書き並べて私に渡す。フムここは港町であり色々な国籍の人間が揃っただけあり、この手の武器のやり取りは意外と上手く行きそうだ。

資金に関しても先ほど市役所と区役所それに県庁に行き裏金を全て提供して欲しいと何人かにギアスを掛けたので相当な金額が手に入りそうだ。

しかし戦争とC・Cが言ったのに関わらず大きな記事が無かったのが気になる。目を引いた記事では10年前の大火災。60年前の太平洋戦争ぐらいな物であり太平洋戦争では日本中が焦土になったのでこの町神戸が特別というわけは無い。やはり、何か重要なパーツが足りない。私のゼロとしての経験が囁く。



私はサングラスをかけ直し、目の前の男の背を向けて歩き出す。問題はそのパーツを知っている人間が誰であるのか？という事だ。この町の一番の情報屋にはギアスを掛けて常に一番新しい情報を無条件で私に送る様にギアスを掛けてあるのだが、やはりそいつも戦争というと太平洋戦争が出てきてしまい何も情報は得られなかったならば、この戦争を知るものは少人数なのだろうか？ならば何故戦争と銘打つ？聖杯・・・即ち永遠の命を約束される神の作りし器。C・Cの心臓に埋め込まれていた物も聖杯であったから此方の聖杯も同じようなものだろう。疑問は次から次から湧き上がるのにそれを知る方法が見当たらない。私の中で無数の思考が飛び交い私はその深い思考の海に沈んでいた。だから角から突然飛び出してきたその女性に反応できずぶつかってしまったのも致し方の無い事だろう。

「っう。大丈夫ですか？」

「ええ。大丈夫です。ごめんなさい少し急いでいたので、それでは幸いにもサングラスを落とす事が無かったのでほっとしていながら声を掛けると女性は余程急いでいたのかそのままその女性は走って去って行った。

さて、次は・・・。

- - - - - SIDE ANOTHER - -

私達は昨日現れたサーバントについて情報を集めている。今朝から町の中で何度か強力な魔力の反応を感じているのだが一向にそのサ

「バントの尻尾を捕まえる事ができない。しかも現れる場所が全く規則性が無く、しかも魔力が使われた気配を感じるのに現地に痕跡が一切見られないのである。あれ程莫大な魔力を感じるといふ事は少なくとも大魔術か魔法と考えるのが妥当だろう。そしてそれが出来る第一候補は魔術師だが魔術はどんな大魔術師だろうと痕跡を残す。それが見られない、と言ふ事は恐らく魔力発動型の魔眼だろう。この馬鹿げたクラスの魔力を放出すると考えたく無いが、最低で寶石クラスの魔眼か最悪の場合最高位の虹クラスの魔眼という事になる。思い浮かぶのはメドゥーサそれにアルクエイド・ブリュンスタッド。メドゥーサの魔眼ならば石化した人間が転がっているはずだがそれが見られないと言ふ事は、始祖の姫君？始祖の姫君が聖杯戦争に居るなどとは悪夢でしかない。だが逆に彼女は世界の守護者だ。故に英霊という人類の守護者になるといふ考られない。故に私はこの謎の英霊の影を追い続けて居るのだが一向に影を掴む事すら出来ない。」

「マスターまた空振りだ。この付近少なくとも100mに英霊は居ない。」

虚空から現れた蒼い槍兵ランスに私は溜息を吐く。今回は発動の場所が近かったので影を掴む事ぐらいは出来ると期待していたのだが今回も空振りだ。これほど影を掴めないという事は暗殺者アサシンの可能性を疑うべきか？

だがこれ程の魔眼を持つアサシンなど聞いたことすらない。

「マスター一つ気になる事がある。」

槍兵が神妙な顔で意見を言う。

「先ほどマスターがぶつかった少年なのだが彼はマスターと反對方

向に歩いていった。という事はこの辺りから歩いて居たとすると丁度魔力の発動を感じた頃にこの場所に居たと考えられる。」

つまり？彼がマスターという事？私が槍兵に尋ねると彼は首を振る。

「可能性がある。というだけの話だ。少なくとも今この辺りに居る人間だけで繁華街という事も在り数百人はいる。その中で一人がマスターと反対方向に歩いていたらと言ってマスターとは断言できない。」

その言葉に私は納得して溜息を吐く。つまり無駄骨ということだ。その溜息に相棒の槍兵はニヤリと笑う。

「だが、このタイミングでマスターとぶつかる人間って言うのは運命という奴を感じないか？だから俺はあいつがマスターだと思う。」  
不適に笑う相棒を見て私も笑みを浮かべる。

「そうね。縁があればまた会つでしょう。その時まで彼の顔覚えておきましょう」

さて私はこれから教会に行かなくてはいけない。言峰神父が私に大事な話があると呼び出されたのだ。私は思考を断ち切って教会に向かって歩き出した。

.....

翌日、私は港に来ていた。勿論武器の取引の為だ。待ち合わせの場所に現れたのは2人の男達、2人ともが一目で堅気ではありません

と判る顔つきに見事に着こなしたスーツ、極めつけは脇のホルスタ  
ーに吊られた拳銃が私達はヤクザですと主張している。

「待っていたよ。」

相手側はこんな若造が取り引きの相手だと思つてなかつたのだろう。  
私が声を発するまで明らかに警戒していたのだが私の言葉に目を見  
開く。だがそれなりに相手もプロなのだろう直に気を取り直して私  
を案内する。連れて行かれたのは倉庫街の中の1つそこに1台のバ  
ンと1台の車が止められていた。そして車の横に立つて3人の男が  
居た。そこで一際異彩を放つのは真ん中に立つ一人の男。男は明ら  
かに纏う雰囲気私が私を案内した男達ともその周りに立っている男た  
ちとも違う。周りに居る男達は荒事向けの私は強いと言う威圧感が  
在るのにその男には威圧感が無い、だが本能的に判るあれは人を殺  
す事に慣れた人間の目だ。そのギャップがその男に異様な迫力を持  
たせる。

「なんだその餓鬼は？」

男が訝しげな目で此方を見る。そこに込められた迫力は中々の物だ。  
流石にこういう商売で頭角を現すだけはある。

「客に対してこの店ではそういう態度を取るのかい？」

その私の挑発とも聞こえる声に回りに居た男達が色めき立つ。だが  
男は面白そうに此方を眺めながら笑う。

「ナルホドナルホド。中々肝が据わっているじゃないか？だがココ  
は武器屋だ。お宅みたいな餓鬼が来る所でもないぜ？」

「俺が欲しいのはアサルトライフルを取り敢えず50丁出来る限り揃えられるなら高性能な物を、そしてその弾を1000発ずつ。それに対戦車ミサイルと対地空ミサイルを其々10本ほどを此方は使えるなら旧式で

「おいおい戦争でも始めるつもりかよ？」

男は肩を竦めて呆れた視線を此方に向ける。その視線に私は思わず笑みを浮かべる。

「ああ、その通りだ。この国で戦争を始めるつもりだ。だから個々に来た。」

その男は今度こそ目を見開く。周りの男達はいい加減にしろという視線を向けて来るがそんなものは気にする意味がない。

「注文を続けるぞ？ミサイルは旧式の物で構わない。後は対物ライフルを入手することは出来るか？他にはグレネードとハンドガンそれに爆薬が欲しい。この3つは今何がある？」

男は驚きそして呆れそして「馬鹿か？」という視線を投げかけた後、呆れた声と視線を向けて来る。

「誰と戦争するつもりなんだ？御伽噺の中の怪獣とでも戦うつもりかい？」

男が肩を竦めてジョークを飛ばすと周りの男達がそのジョークに笑い声を立てる。

「御伽噺かその通りだ。国を憂う夢想家が国という御伽噺の中の怪

物と戦わずに誰と戦うと言っただい？」

その言葉に周りの男達は笑い声を立てるのを辞める。男は苦い物を見たような顔で此方を見る。

「坊主お前の名前は？」

「テロリストに名前を聞くのかい？まあ名が無ければ不便ではあるがな。ゼロだ。」

男は言葉に一瞬黙り込み言葉を続ける。

「その名前覚えておこう。対物ライフルは時間をかければ入手できる。グレネードは今パイナップルが5つにスタングレネードが4つそれにスモークが2つある。爆薬はC4が1kg程ならあるぜ。拳銃ならトカレフにコルトにマグナムどれが良い？」

「グレネードと爆薬は両方とも貰おう。揃えられるのならグレネードは100個ずつ爆薬はc4を200kg程にダイナマイトと400kgほど欲しい。対物ライフルは入手できるなら3丁頼む。拳銃は試射しても構わないか？それに弾なのだが全てホローポイントで入手出来るか？」

男は完全に呆れた顔をしている。

「ああ出来るだが高く着くぞ？」

「構わない。支援者は気前が良い。」

そう言うと私は机の上に札束を5つ並べて置く。男はニイという擬

音が似合いそうな顔つきで此方を見る。

「ここで俺達がお前さんを襲うって考えなのかい？」

「その時はお宅は顧客を一人と大口を一つ失うだけさ。」

私が胸のポケットから通話中の携帯を相手に見せると男は大笑いを始める。

「ククク。若いのに中々取引という物知ってるじゃないか。いいだらう取り引け成立だ。武器は一週間あれば揃う。来週と同じ時間にこの場所だ。値段は初回という事でまけて4千万だ。この5百万は前金として受け取っておこう。」

「判った。銃はココで撃つても大丈夫か？」

男が頷くのを見て私は拳銃を撃った。

.....

## 戦術論（一応完成）（後書き）

長々とお待たせしました。2話同時に書いたんで2週間掛かったって事でご容赦ください。（Fate系の小説更新分読んでたとかそういうことは……さてこれからもよろしければよろしく願います。

一応教会でのやり取りを入れようかとは思ったのですが。気が乗らないので没になりました。



## お詫びという名のやっつけ仕事（前書き）

卒論とテストで2ヶ月弱放置してました。すんません。

作者プレッシャーx着いてますのでご容赦くださいorz

追加ですが

この小説1話1万文字を目安にしています足りないのは大体どこか端折った代物ですので、後後修正入れるかもしれませんが（其処まで根気が続けば

## お詫びという名のやつつけ仕事

「正義の味方など存在しえない。誰もが望んで争い殺し合い自分より弱者を生み出し支配する。そんな世界に正義など存在しない。それが世界の真実だ。」

アーチャーが冷静に答える。

「違う。例え世界がそうでも、それでも 『誰もが幸せになる答え』を探し出してみせる！それを世界に示すのが俺の正義だ。」

真つ直ぐにアーチャーの目を立ち上がったままの士郎が睨み付ける。二人の言い争いに凜もセイバー（サーバント）も動けない。2人とも士郎の歪みを直視してしまったのだからそうだろう。

「はいはいそこまで、2人ともヒートアップし過ぎだね。もう夜遅いんだから他人に迷惑になっちゃおうよ。」

その一触即発の流れを切ったのは先ほどまで武器の点検をしていた青い髪に白衣を着て眼鏡を掛けた若い男だった。

「でもこん夜遅くこんな男女混合の大人数で帰って来た段階で回りの噂になっちゃうから同じかな？うーんなら一層の事殴り合いで決着付けたらいいんじゃない？男同士の素手の殴り合い憧れだね。青春だね。」

白衣の男は楽しげだ。本気でこの危険な状態の中サーバントとマスターで殴り合いをすれば良いと思っていつているのか？・・・この男ロイドの場合本気だろう。明らかに面白そうだから煽っているの

がありありと解る。

その言葉にアーチャーが肩を竦め返す。

「マスターこのままこいつが殴りかかってきた場合、一方的に殴り倒して良いか？」

明らかに挑発だ。肩を竦めているが明らかに戦闘に移れる体制に移っているのがその証拠だろう。その言葉に土郎の肩が震える。セイバーもそのアーチャーの明らかな挑発を受けてアーチャーを睨み付けて居る。今にも剣を抜きそうな勢いだ。その更に悪化した空気を相変わらず能天気な声がぶち壊す。

「うんうん青春だね〜やっぱ若者はこうじゃないと。ところでアーチャー君一つ聞いてもイイ？君ささつき『世界に正義など存在し得ない。』っていったよね？ね？それって君自身が正義の味方を目指してたって事でいいのかな？」

あまりにもぶつ飛んだ話にセイバーが土郎がそして燐が目を点にする。そんな混乱の中アーチャーが答える。

「何故そうなる？私は『正義など存在し得ない』としか言っていないのに何故私が正義の味方などという素っ頓狂な結論に至るのかね？」

ロイドは肩を竦め大袈裟な動作で一礼する。だが、その細められた目だけがアーチャーの目を真剣に覗きこんでいる。

「では僭越ながらこのロイド伯爵行使が君の分析をさせて頂きます。まず君は僕の見たとくろ他人に寛容な人間すなわちお人良しな人間

だ。何故そんな風に見るかって顔だね？少なくとも君なら戦いの最中にセイバーくんや士郎くんを殺す機会など幾らでもあった筈なのに殺してないのが大きな理由の一つ。

同盟？打算？貸し？

君は僕の見たところ目的の為ならどんな相手でもどんな手段も取るタイプの人間に見えるね。だからこそ解せないんだよ。君が専門とするのは長距離からの一方的な狙撃戦、即ち殲滅戦だ。相性で言えばセイバー、ランサー、バーサーカーこの3騎以外なら距離を詰められる前に君の狙撃能力ならば苦としないはずだ。ならランサーが脱落した段階で君はセイバーを殺すのが最善だったはずだ。何故ならバーサーカーとイリアス・フィールは城に籠っているため先手が常に取りれる。また、バーサーカーは性質上真名開放を行えない為、マスターを狙われた場合守るには常にマスターを抱えて逃げることに出来なかつたはずだ。君ならば逃走する相手を追撃しながらバーサーカーを削りきる事も可能だった筈だ。

あえて殺していない理由としてはマスターの意向に従っただけといえれば解りやすいけど、このバトルロワイアルの中で幾ら共同戦線を張れるからとは言え魔力に問題を抱えて全力で戦えない近接戦のサーバントなど長距離戦で狙撃を得意とする君には足手まといでしかない。それが解らない程君が無能には見えないね。

一番効果的だったのは共同戦線を張った後、マスター保護の名目で常に距離を取って狙撃を行いセイバーを削り役、囮役にしてしまうのが一番手っ取り早かつたはずだ。さて、最善を常にとる優秀な騎士様が最善を取らない。これは矛盾だよな？」

両手を大きく開きロイドは一步前に出て騎士の瞳を覗き込み続ける。

「なぜ君はその方法はしなかつたのか？これらは幾らでもマスターを誤魔化す事が可能であり戦略的に楽な方法だったはずだ。マスターを誤魔化さずマスターの意向に従っていたのは単純にマスターを

気に掛けたというのが一番しつくり来る解答だね。

尚且つアインツベルクの城で君はセイバーを見捨てる選択ではなく自分が犠牲になる選択を下そうとした、これも聖杯を望む普通のサーバントでは考えられない事だね？

他のサーバントを助けようとするわ、マスターを気に掛ける、そんなサーバントは『お人良し』と評価されても文句は無いだろうに。」

その場に居る全員がロイドに視線を向けたまま動かない。それは予感。この男が何かとんでもない事を言いそうな即ち危機感を持ったそう言えはいいのだろうか？だが全ては無駄といわざる得ない。何せこの男生粋のKY男だからDA！

「そこからは逆に君は士郎君に対して態度、というより士郎くんのもっている正義のあり方に対して嫌悪に近い感情を持っているという推測が成り立つ。まあそこからお人よしの君が正義の味方で君は正義を成せなかった故に正義の味方を否定する英霊になったというのが僕の推測。

所で君の言う『正義が無いから正義の味方が存在しない』なら悪くてなんだい？正義が無くちゃ悪はなり立たないんだよ。

だから

その矛盾がさ、君を殺したのかい？哀れな英雄さん？」

そこでゼロが声を上げる。

「さて、その前にロイド！なんでお前が出てくる！？」

全員がその言葉に顔を見合わせる。その通りだ。なぜ異世界の住人が聖杯戦争にいる？答えはロイドの口から答えられる。

「きまつてるじゃないか！作者が断片を書いて筋書きに沿わず破棄した断片を、遅れたお詫び代わりに引つ張りだしてきたからに決まつてるじゃないか！！」

僕を出す方法として考えられていたのが

”禁断の遊戯”（チェスゲーム）の追加効果

？・ルルーシュと親交のあつた人間を一人だけアーカイブから英霊として召還&使役できる。

（召還と送還が可能 故に交代可能）

しかも僕が出てきた理由が『その矛盾が君を殺すよ？』ってルルーシュに言わせると凄い違和感があつたからって理由だよ？

まあ確かに

『ゼロこそ私の望んだカオスの権化』っていうデイトハルトの名言を思い出しながら 同じ台詞をルルーシュがスキップしながら言う・・・・・・正にカオスの権化」

ゼロは仮面越しに嫌な表情を浮かべているのが良く判る口調で答える。

「やめてくれそんなシーン想像もしたくない。まだスザク\*ルルの

「他人を想像した方がマシだ」

そんな言葉を右から左に聞き流しながらロイドは続ける。

「他にもこのスキルでもう2個書いて没になったシーンがある。ドンドン行くよ」

-----

「捕らえた！」

セイバーのエクスカリバーが唸りを上げてアサシンに襲い掛かる。距離もタイミングも完璧といって良い斬撃。近接戦能力が低いゼロではこの一撃を凌げない故に焔が目をそらしてバーサーカーの方を見たのは仕方がないことだったのだろう。

鳴り響くのは鉄と鉄のぶつかり合う音とセイバーの驚愕の声

「な!?!」

地面を滑る音。その時になって焔は、驚愕に目を見開いているセイバーを。そしてその前に立ち剣を振るうゼロを再び視界に納める。ありえない……。騎士王が剣でアサシンに遅れを取っている? セイバーの剣が右から左から上から下から縦横無尽に駆け巡る。それでもアサシンは止まらない。その斬撃の雨を捌き避け弾き殴り蹴り飛ばしながら四肢を全て使いながらセイバーに殴りつけ1歩1歩セイバーを後退させる。

「ちっセイバー下がれ」

アチャーが弓を構えてアサシンに狙いを定める。だがこの声に答えたのは全く別の方向からの銃撃だった。アチャーは辛うじて直撃を避けるが体制を崩す。そこに銃を撃った黒い影が真っ直ぐに近づいていく。そしてその男が振り下ろす剣を辛うじて双剣がうけとめる。

振り下ろされたのは紫の片刃の剣

振り下ろしたのはゼロ・・・そう今セイバーと戦って居るはずのゼロだった。

「な？ゼロが2人いる？」

混乱驚愕。同じアサシンが2人いる。それはその場の人間を混乱させるのに十分な光景そしてその隙を見逃すほどゼロは愚かではない。セイバーと戦っていたゼロがセイバーのその隙を突いてセイバーを弾き飛ばしアチャーの背中から迫る。

「もらったぞマスター」

声は凜と土郎の後ろの雑木林から響く。魔力放出によって駆けつけようとしたセイバーの動きが止まる。停止は刹那、視線は雑木林にそれだけでゼロがアチャーに迫るには十分な時間。

.....IF.....

目の前のゼロが放つ言葉に合わせてセイバーの背後から忍び寄るもう一つの影そしてセイバーの背後から声を放つ。

「ならばこそだ。セイバー」



セイバーは思わず視線を背後に向け、そして赤い瞳に覗き込まれる。

「ゼロの名において 君に我に従う喜びを与えよう」

.....

ロイドが手を叩き会話を続ける

「はあい、ここまでく続きを読みたかった人は残念でした」

結局とまあ『ゼロが2人?』をやって見たかっただけらしいですよ  
作者曰く、囿と本命でギアスを掛けるぐらいしか思いつかずスザク  
とゼロ以外の活躍が思いつかなかつたらしいので没になったらしい  
よ」

「ふむ文章が適当なのはどうしてかね？」

アーチャーが肩を竦めながらロイドに尋ねる。

「それはね。断片的にツラツラ書き連ねた物を簡単に編集しただけ  
のやつつけ仕事だからじゃない？他にもね会話の断片から解ると思  
うけど」

最初のアーチャーの正義はニコニコ動画の一本杉さんのアチャ子の  
MADから引用

”禁断の遊戯”（チェスゲーム）もやつぱりニコニコ動画でギアス  
MAD検索すればすぐにわかる黒ナナリーのMADから引用

ギアスを掛けるところは、ルルがシュナイゼルにギアスを掛けるシーン  
をイメージしたらしいよ

見事に全部綺麗にパクりばっかだねー こんな事ばかりやってる  
締め切りに間に合わないんだよ 最後のは”禁断の遊戯”（チエス  
ゲーム）を更に変化させて

?・ルルーシュと親交のあつた全てを一人（１つ）だけアーカ  
イブから英霊（宝具）として召還&

使役できる。

（召還と送還が可能 故に交代可能）

此方はナイトメアフレーム出すと卑怯くさいだろ。という発想から  
逆転の発想から。ナイト・オブ・ナナリーみたいにアーマードスー  
ツにして

バーサーカーVSナイトメアフレーム

が書きたくなつたから書いたらしいよ？因みにこの切っ掛けって読  
者さんの騎乗スキルがないと言われたのが切っ掛けだったらしいよ

WWW

それじゃいつてみようかな？

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

ゼロの前に現れたのは漆黒の鎧、明らかに現れ方からしてあれは宝  
具だ。高さはバーサーカーより一回りほど大きなそれにゼロは手を  
触れた後一瞬にして鎧に飲み込まれた。

その間にもバーサーカーは鎧に向けて肉薄する。宝具を使おうともこの一撃が防げるはずがない。そんな絶対的な確信を持ってバーサーカーの凶器が振り下ろされる。

響くのは轟音

「嘘」

静寂の空間にイリアスフィールドの音が木霊する。何が起こったのか？ 決まっているサーバント中最弱ともいえるアサシンが力でなら全サーバントの中で最強のバーサーカーの渾身の一撃を受け止めたのである。

ありえない

燐が思ったのも致しかたが無いのであろう。だが驚愕はまだ始まったばかりだ。黒の鎧の肩が開き中から紅い宝石が表れる。あの宝石売ったらいくらぐらいになるのか燐が思わずそんな計算をしてしまったのは守銭奴としてしかたゲフンゲフン 赤い宝石が光を集め発光する魔力の収束は感じないでも、アーチャーが私をセイバーが士郎を掴みながら全力でその場から飛び退く次の瞬間紅い閃光が辺りを吹きとばした。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

ありえない。目の前の光景は余にも現実<sup>マシユッ</sup>から隔絶され過ぎている。弾き飛ばされたバーサーカーが体制を建て直す間に漆黒の鎧は静やかに空を舞う。滑るように数m上空から睥睨するようにそしてまた

肩の赤い宝石が発光し、赤い光が当たり一面に撒き散らされる。

ありえない。

私にはそれ以外に応えるべき回答が出てこない。また改めて解析した事で判ったが、あれは魔力を一切使っていない。空を飛ぶのにもバーサーカーの一撃を受け止めた盾も辺りをなぎ払った紅い光も一切合財に魔力を感じないはずだ。何せあれは……

「ロボット完全二足歩行」

隣で士郎が呆然と呟く。燐が隣で目を剥いている。セイバーは……ああロボットと聞いて理解できてないのか。まあその通りだ。誰だあんなサーバントと渡り合えるロボット作ったのは！！私の中のからくり好きの血が騒ぐ

「アーチャー！！」

燐の言葉が現実逃避しかけた私の意識を引き戻す。そして彼女の視線が私に何を求めているのか理解する。

「ああ。あれは君達が思う通り魔力を一切使って無い。恐らく全てを科学だけで作り上げた鉄の塊だ。」

「ありえません！！あんな鉄の塊が空を魔力を使わずに飛ぶなんて！！」

セイバーがやっと事態の異常さに気がついた様で声上げる。だが

「今日の前の光景を直視しろ。現実には魔力を一切供給されずに熱を

排出しながら空を飛んでるロボットが居るだろう。」

私はその言葉を切り捨てる。そこで私は苦笑する。ああ確かに私は数十年後の英霊だが、別段数百年後の英霊が呼ばれても可笑しくは無いのか。ならロボットというのもありえるのか

「まったく聖杯戦争には驚かされてばかりだ。」

私の独白は宙を舞い爆音に紛れて誰の耳にも届かずに地に落ちた。

- - - - -

ゼロは苦い表情を隠せない。あの至近距離で八ドロン砲を当てたのに咄嗟に斧を盾にして致命傷を避けたバーサーカーの反応とあの高温に耐えるタフネスには呆れるしかない。やはり魔術というのは規格外だな。

高さ数mから一方的に八ドロン砲を浴びせながらルルーシュはそんなことを思っていた。だから油断していなかったといえは嘘になるだろう刹那煙の中から飛び出した黒い塊は次の瞬間一直線に羽を粉碎した。

6枚の翼の内の数枚を粉碎されても別段痛手ではないが今回は右側の3枚の羽の力場をすべて破壊された。片側を全て破壊された為姿勢制御が困難でありここで無理をすれば飛べなくなる。ルルーシュは咄嗟にそう判断し軟着陸を選択する。羽へのエネルギー供給を一時的に遮断して、空中で姿勢を制御して、着陸の姿勢をとらせ、着陸の際に両足でのエネルギー分散、着陸した際に横転を防ぐために姿勢制御システムの1vの向上、着地の直前飛行システムに再起動をかけ一瞬だけ慣性を殺す。落ちる僅か2秒の間に彼が行った工程

は6工程信じられない早業といって過言ではないだろう。

地に落とされた漆黒の鎧を纏った王そしてゆっくりとその前に自らの武器を投げるといふ荒業で王を地に落とした漆黒の巨人が立ちふさがる。

ここに第六次聖杯戦争でもっとも苛烈な素手での殴り合いが始まった。

- - - - -

「はい。終了　　作者からの伝言だと『殴り合いのシーンのイメージは作者にあるらしいけどまだ書いていない+書く予定が無いので妄想で補完よろしく』だそうだよ。」

ロイドが歌うように報告する。誰か精神科の医者かセシル嬢を至急配備を―

「追加で連絡だよ　　4話相変わらず難産が酷すぎて未だに完成しないから6話の方が先に完成しそうだよ　　『設定が―裏設定が―武器設定が―戦場の公園を何処の実際の公園にするんだ―決まらない!! かけない!! どうしよう!! とか声が聞こえたのは幻想です。』なんて神の声をいわなきあいけけない気がした」

神の声を語る可愛そうな子に愛の手を。そっとセイバーが神に祈り、隣が目を逸らし、士郎とアーチャーが優しくロイドの肩を叩く

「うんわかった。疲れてるんだね」

「ああ良い精神科の先生をしっているんだ今度紹介しよう」

そのままズルズルとロイドは部屋から2人に連れ出されていく。

「ちよちよつとまったまってばー」

ロイドの悲痛な叫びはゼロの一言で粉碎された。

「今までありがとう。どうやら私は君を働かせすぎたようだゆっくり休みたまえ。なに大丈夫だ後任はセシル嬢に頼んでおこう。」

そつと黙祷を捧げるゼロを愕然とした表情で見つめながら無情にも扉が音を立てて閉められた。

## お詫びという名のやつつけ仕事（後書き）

最後にですが

Fate/zero ｾﾞコードギアス再生のルルーシュと一部ネタ被ってますが別段今回はパクッタ訳でもないのですが

あちらの方が更新先ですので

ネタ被ってない？はやめて下さい。というかパクッタと言われた場合自分の方が明らかにパクリになるので。

あと上げてから気がついたハドロン砲がハイドロカノンになってた・・・ナルホドポケモン青になったのね？（笑

ついでにゼロに乗せよう思ってたのはガーウエン（1期の最後にCと一緒に沈んだやつ）です。



## 運命の針（前書き）

遅くなりましたが更新

正直できが悪い。

追加で出来の悪い4話もどつどつ  
諦めた・・・

## 運命の針

「其方はどうだ？」

「正直さっぱりだ」

私は手にある書物を彼に見せながら肩を竦めて応えた。

「本当にこの場所に聖杯戦争について書かれた書物があるのかい？」

私達は今龍洞寺の倉庫に来ている。理由は手紙に書かれていた倉庫を探せという言葉からだ。唯漠然と書かれたその文章は倉庫のどこに何があるかと書かれておらず結果的に私達はこの数日寺の倉庫に住職である父の許可を得て調べている。だが正直芳しくは無い。この龍洞寺は歴史としては150年ほどしか建てられてから時間の経っていない比較的歴史の浅い寺だが、その4代に渡る住職達が書物を物品を収集して投げ込んだのがこの倉庫だ。お陰で、本の整理も分類も適当で読むことさえ困難なほど痛んだ物もすくなくない。

「ふむ今度寺の皆で倉庫の整理と分類でもしてみるか」

私は嘆息と共にそんな言葉を吐いた。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

彼の嘆息を聞きながら私は少くない焦りを感じていた。戦争の基本は「兵力」「戦術と戦略」「兵站」「士気」そして最後に「情報」大雑把に分けてこの5つが勝敗を決する。この1つでも疎か

にする者には死が待ち受けている。逆にいえばこの1つにさえ相手に勝れば勝利する可能性はあるのである。

今現在準備できているのは私の戦略家としての才能「戦略と戦術」のみ。大雑把に言ってしまうえば今私達が敵と相対した時勝てる可能性は私の才能が相手に勝っているとして最大で20%即ち

5回戦つて1度勝てるかといった可能性しかないのである。何時何処で敵と戦うかもしれないこの状況、そして敗北は死を示す条件は全くもって安心できる要素は無いに等しい。そしてその可能性を1%でも上げる為にこの倉庫に数日籠っているのだが全く進展が無いのである。幾ら私と言えども少しは不安を覚える。

「そういう其方はどうなんだ？」

一成の問いに私は嘆息で持つて応える。すると彼も理解したように視線を手元の古本に戻し読み始めた。マスターである彼は今どう思っているのだろうか？戦争に巻き込まれたのに何も判らない焦燥感それは戦場において一番危険な要素だ。その事を私は幾度無くあいつと敵対して戦勝で戦い敗北することによって思い知らされた。・  
・皆は今頃元気にしているのだろうか・・・

私はその思い出を振り払うように頭を振り意識を切り替える。今は感傷に浸る場合ではない。感傷に浸るのはこの戦争が終わった後でも可能だ。そして今一瞬の感傷が私の生死を変える可能性がある以上今の一瞬は一秒たりとも無駄には出来ない。だがここまで本を探して何も出てこないというのは少し可笑しな話だ。既にこの倉庫に入ってから数日が過ぎているのだが一向にそれらしい書物は出てこない。彼女は「倉庫を漁れば必要な情報が1つや2つ出てくる。」と書いていた。ここで見方を変えてみよう倉庫にあるのは何だ？本？物品？それともこの倉庫自体に意味があるのか？

「一成少し聞きたい事がある。この倉庫は何時立てられたのか書か

れた資料はあるか？」

一成は顎に手を当てて少し考え込んで応えた。

「確か先ほど読んだな少し待ってくれ。………あった。

この寺は元々は名士の一族の土地でありその代の名士の勧めでここに建てられたという話だ。因みに、この場所にはその一族の倉庫がつてそれを改築増築する形でここに寺が出来たと書いてある。」

それは余にもおかしな話だ。一成も気がついたようで此方をみる。

「つまり、こんな当時山奥だった場所にわざわざ苦労して倉庫を立ててあったと。」

私の言葉に一成が続ける。

「なのに、その倉庫をあつさり手放すどころか其処に寺を建てることを薦める。」

私が答える。

「この辺りの地形は確か石灰岩で構成されていてこの下にはいくつかの空洞が確認されいたはずだな？」

一成も頷き応える。

「そしてこの倉庫に寺を建てるのはまるでこの下にある何かを鎮めるとも取れなくは無い。例えば死んだ人の魂なんかだな。」

なるほどならば回答は簡単だ。

「この下にあるのか情報は」

ならすることは簡単だ。私達は床に積もった誇りを丁寧に書き分け始めた。魔女はこの倉庫に情報があると云った。ならばこの倉庫にこそ下に降りる階段があるはずだ。しばらくの後、私達は壁の隅に窪みと木の棒をその横に薄っすらと木の切れ目を発見し未だ昼前と言ふ事もあり昼過ぎにその通路を開く事を決めた。

- - - SIDE ANOTHER -

「龍洞寺で起こった魔力の発現は明らかにサーバントのものだったが未だに我らが教会へマスターが訪れない。即ち、このマスターは前回の聖杯戦争同様魔術師ではない人間による召還の可能性があるので理解できているな。」

漆黒カソリックの法衣を纏った男が薄暗い部屋の中で呟く。

「それで？あの寺にこの間偵察に行つて来たが、サーバントが来たの出迎えも対応も変わりがなく殺意も注視されることもなく手ぶらで帰ってきたことが不満なのか？」

応えるのは薄暗い部屋の中で異彩を放つ紅い槍を持つ槍兵ランサー

「その通りだ。相手が魔術師ではないのなら聖杯戦争の意味すら知らずサーバントと普通の人間の区別がついていなかった可能性も否定できまい？」

男の言葉にランサーは問う。

「ならどうしろと？」

男は笑いながら応える。英霊の1体でもあるランサーすらも一歩引くような危険な微笑みを伴って

「龍洞寺の中にいる人間全てを皆殺しにして来い。」

ランサーはその命令を聞いて吐き捨てるように言い放つ

「騎士である俺に何の力も持たない人間を殺して来いと命令するの  
かマスター（クソヤロウ）」

男は未だに微笑みを浮かべながら応える。

「その通りだ。出来るだけ残酷に見せ付ける様に苦しむ様に殺してくれと尚一層良い。」

その笑みを一瞬睨みつけその男に背を向けてランサーは窓際に進む。そして振り返りもせず男に問う

「もしマスターが龍洞寺の人間じゃなかったらどうするつもりだ？」

男は浮かべる笑みを更に濃くしてその問いに答える。

「何も変わらんよ。ただ騎士を名乗る卑怯な殺人者が1人できあがるだけだ」

ランサーは窓を開け放ち吐き捨てる。窓をカーテンを開けたことにより外の赤い光がその薄暗い部屋を照らし紅く血の様に染め上げる

「地獄に落ちろマスター（クソヤロウ）」

最速のサーバント、ランサーが紅く染まりし空を舞う。その鋭き猛禽の爪を最初の獲物目掛けて振り下ろさんとするために。

- - - - -

昼から倉庫の階段を降りて私達は空洞の中に来ている。この中に入つて思い至つたのがこの空気いや感覚と言つべきものだ。神捻島の洞窟を思い出させる何処か神聖さと何処か紙一重の危つさを持ち合わせた空気  
この空気を一度しか味わつたことのない私でも判るのは

「一成。」

「なんだルル？」

「警戒を怠るな。何かが起こる。」

最初に出会つた時の温和そうな顔立ちは見る影を失い何処か達観したような大人びた顔つきを見せて一成は声を潜めて聞き返す。

「それは経験から来る予想と言う事か？ルル」

「いや、実体験だ。この空気は何かが起こる。」

私のその声を聞いて彼はしっかりと頷き私の背を追うように、私の動きを妨げない様に距離を開けた。私の方が土壇場の際に対応が利くと判断して私の動きを妨げず私の動きを追う事で自分の安全を確

保する。やはり彼は優秀だな。私はそんな事を考えながら前を向く  
さてならばそれに応えるのが召還された者の勤めだな？私は薄暗い  
洞窟を静かに細心の注意を払いながら降りていった。

2人の主従は暗い洞窟の中ペンライトの明かりを頼りに暗い暗い洞  
窟を降りていく。この先にあるものを見るために

例えその先に地獄が待ち受けていようと、ただ前を向いて明かり  
の照らす方に進み行く

- - - - - SIDE ANOTHER - - -

「大丈夫か？」

其処に居たのは長身長躯の男。語るべき事は多くない。特徴らしき  
特徴を持たずただ其処に居るだけ。だが回りにもし普通の人間が居  
たならその人間はその男を決して忘れないだろう。そんな普通で普  
通から逸脱した男が静かに壁に背を預け問う。

「.....」

返答は無くただ静かに時だけが過ぎる。その場に誰も居ない訳では  
ない証拠に布擦れの音は止まない。男も返答を期待していた訳でも  
無いように静かに片瞳を閉じる

しばらく無言の時が過ぎる、唐突にその場に居たもう一人が言葉を  
放つ。

「ご協力感謝します。ところで貴方の左腕を見せて頂いても構わな



いでしょうか？」

男は無言で左腕を前に出す。もう一人はその動作をうけ近寄り左腕を手に取りしばらく眺めた後溜息を吐く。溜息を目の前で吐かれたのに男は微動だにしない。ただ為されるままに腕を出すのみ

もう一人は男の様子を見てしばらく考えた後男に名を名乗る事にした。騒ぐようなら暗示で操り人形にでもしてしまえば良いと物騒な事を考えながら。

「まず私の方から名乗りましょう私の名前はキャスター魔術師」

「葛木宗一郎」

男は名に関して問うわけでもなく、ただ静かに自らの名を名乗るのみ。其処に動揺や関心は見られない。否、唯名前を重要視していないだけなのかもしれない。

「大丈夫か？」

男は同じ言葉を繰り返す。

「ええお陰様で」

もう一人は少しはにかみながら応える。顔が少し赤い気がするのは夕日のせいだろうか？それとも昨日の行動をはじているのだろうか？

男は無頓着にそうかと一言言うなりもう一人から背を向け歩き出す。驚いたのはもう一人の方だ。もう少し話が続くかと思ったのがいきなり放り出されたのだから

「ま、まっつて」

もう一人が慌てて声をかけると男は立ち止まり半身をを後ろに向け  
る。沈黙が辺りを包む。魔術師自身も何故彼を呼び止めたのか判ら  
ないらしく困惑の表情を浮かべている。勿論、葛木自身は最初から  
殆ど無言だ。その沈黙を破ったのは意外なことに葛木の方だった。

「いく当てが無いのなら着いて来い。」

再び歩き始めた葛木の背を呆然と眺めた魔術師はハッと正気に戻  
ると慌てて彼の背中を追って小走りに歩き始めた。

孤独な魔術師と孤独な戦士はゆっくりと歩き出す。

互いの持つ孤独は同質されど、理解するには互いの生きた道のりが  
違いすぎた。だが今は理解できなくても理解されなくてもいいのだ  
ろう。彼らは孤独な獣。相手が自分と同じ様な道を歩んできたのな  
ら互いの傷を舐め合う事は出来る。そして、今互いを理解出来なく  
ても今から共有する時間は互いを理解できるのだから。

孤独の中で出会った2人は深い漆黒の中で白熱の輝きを放つ。何も  
かも焼き尽くす様な激しい光を炎を撒き散らしながら只今は静かに  
暗闇の中へ歩み行く。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

私と一成が辿りついたのは少し広い空間。道は一本道で尚且つ畏は  
道のり場所には仕掛けられてはいなかった。自分達の通った道意外  
にも向かいなどに何本かの道があるが今重要なのはそれでは無い。

目の前にある杯だ。

「これは？」

「恐らくこれが聖杯だろうな。」

直径1m程の大きな杯。その周りには数多の文字が書き込まれている。雰囲氣的にこの先に在るのが聖杯だというのは判っていたが、だがこれが聖杯なのだろうか？使われている文字は見覚えのある言語に一致しない。あえて近い言葉を思い浮かべるならルーン文字だろうか？私はその文字を詳しく読もうと聖杯に触れようと手を伸ばす。

バチイイイイイイイイイ

トンデモナイ音と共に私は弾き飛ばされた。叩きつけられた壁に窪みが出る程の勢いだったのだから普通なら起き上がるのも困難であるのは明らかだ。一成も慌てて私に駆け寄ろうとするが私は直ぐに起き上がったのを見て安堵の溜息をつく。

明らかに異常だ。

壁に窪みが出る程の勢いで叩きつけられ貧弱な私の体が耐えられないはずがない。なのに私は痛みを感じたものの直ぐに痛みが引き起き上がれるまで回復した。よく考えれば予兆は幾らでもあった。このペンライトで照らす薄暗い洞窟の中で何故私は一成の表情を細部まで識別することが出来たのだろうか？顔にペンライトを当てたのなら普通は眩しさで目を細め表情が崩れる。・・・確認が必要だな。

「一成すまないが一度ペンライトを消してくれ。」

一成が頷き。彼の持ったライトを消す。私も続いてライトを消す。

その次の瞬間目の前に写った光景は異常だ。ライトが無い暗闇の中で私は一成を視認出来るのである。暗闇に目が慣れているなどと言うにはこの場所は暗い。そして一番の異常とでも言えるのは薄っすらと聖杯の周りを何か包んでいると言う事だ。間違いなく、この異常の原因全てがこの聖杯にあるのだろう。私は確認してペンを点ける。

「ふむ、やはりこれが聖杯で間違えなさそうだ。」

「ならこれを持ち出せばいいのか？」

一成の問いに私は首を振る。無理だ。何故なら吹き飛ばされた私が証明している。触れられないのだから持ち出すと言う考えは無理がある。ならこの周りに描かれている文字こそが問題の核となりうるのである。

「一度引き上げる事にしよう。これを持ち出す何らかの方法がある筈だ。」

私と一成は来た道を引き返す。

運命の針は静かに時を刻む。まるで違うスピードで動く3つの針、しかしご存知だろうかこの3つの針は12時間に一度完全に重なるのである。運命の歯車が刻む針は止まらない。3つの針の邂逅の時は静かに近づいていた。

.....

今回初めに気がついたのは一成であった。これも「危険を感じれば

それに対して冷静に思考せよ」というギアスの力なのであろう。立ち止まった一成を振り返るルルーシュ。上を見ている一成に釣られてルルーシュも続いて上を見て数瞬の後異常に気がつく。洞窟の天井から砂が降ってきている。偶然と言い切るには絶妙のタイミングであり明らかに戻った先で何かが起こっていると考えるべきだ。今回は幸いにも近づく前に気がつけたのが唯一の幸いだな。

「どうする？」

一成は静かに聞く。そこに親兄弟に対する不安は感じられない。ギアスを掛けておいて正解だったな。普通ならココで取り乱してもおかしくも無い状況なのに冷静で居てくれると言うのは非常に助かる。

「一成、君はこの道を戻って出口を探せそしてこの寺に騒ぎが起こっていると警察に通報してくれ。私は敵の姿だけでも確認してくる。」

その言葉に一成は頷き引きそうとする私は彼を引きとめそれを渡す。一成は驚きで目を見開いているが目を細めて静かに判ったと言うとそれを片手に聖杯のある方向へ歩き出す。彼なら大丈夫だろう。私も準備をした方がいいだろう。靴から取り出すのホルト380ガバメント護身用の武器として携帯するのに便利な銃だ。爆薬はc4が1kg程しかないがこの洞窟を崩落させるには十分だろう。私は入り口に向かって歩き出す。

結果的にc4は倉庫の真下に仕掛けた。天井に仕掛けるにはやはりあの場所しかなかったからだ。拳銃を片手に倉庫の入り口から外を見た私が見たのは冗談のような光景だった。

戦って居るのは3人の男女、一人は槍を振るう蒼い男……速い。スザクすら上回るスピードというのは冗談としか思えない。次に目に着くのはやはり男だ。葛木総一郎といった男だったか、槍使いの放つあのスピードの槍捌きを交して生き残っているのは脅威だ。彼が使っているのはどこまでも冗談の様な体術だ。槍を手でいやすなんて芸当普通考えてもやらない。出来るのは其処までの錬度とスピードがあり、もう一人が居るからなのである。最後の一人は女、彼女は常識という意味で一番冗談だ。彼女が言葉を発する度に手の上に光が集まり其れが槍を持った男に襲い掛かる。魔法とでも言うのであるだろうか？

槍使いの男の槍が無数の刺突を放つ。そのスピードは神速 其れをもう1人の男が捌く完全に捌き切れている訳でもなく全身に無数の切り傷を負いながらそれでも急所には一撃を入れさせない。後ろから女が絶妙のタイミングでカットを入れて追撃を止める。明らかに2人組みがギリ貧の状況だ。加勢するか？それともここは引かせてもらうか。そんな事を考える私の前で唐突に戦闘が終わる。

槍を持った男が男女から離れたからだ。次に放った言葉は私を凍りつかせるのに十分な言葉だった。

「もう少し殺し合いたい所だがマスターの意向もある。ここらで引かせてもらうぜ？だがその前に目撃者は消す。」

視線が此方を向く。籠められていたのは殺気 ばれていたのか！私は躊躇わず拳銃を抜き撃つ。その槍を持った男はその銃弾を叩き落としながら此方に突っ込んでくる。信じられない。銃弾を避けるならまだしも、飛んでくる銃弾を打ち落とすなどスザクでも不可能だ。私は手榴弾のピンを抜き相手との間に投げた後スタングレネードを投げて階段に走る。身体能力が桁違い過ぎる。正攻法ではとてもで

はないが殺せない。ギアスを使うか？いやギアスを使うにもルールを命令する時間が必要だ。その間に心臓を貫かれるだろう。確信に近い予感がある。爆音を背に階段を駆け下り私はすぐさまC4の起爆スイッチを入れた。

- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -

## 運命の針（後書き）

一応週1回で更新できればいいなと思ってます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7554i/>

---

Fat e / Stay Night-Stand Alone Complex / 世界で最も孤独な王

2010年10月10日04時40分発行